情報学ゼミ雑感

竹之内禎
東京大学大学院情報学環助手

「情報」と名のつく学問は、ドキュメンテーションやコンピュータ・サイエンスをはじめとして百年余の歴史を持っているが、今日広義の情報学（informatics）と言えば、物理的電気信号から人間的意味作用まで、およそ情報に関する諸研究をさす大変広い意味の言葉であり、インターネット時代に形成・統合されつつある新しい学問領域と言える。ここでは、私が情報学のゼミを渡り歩いてきた個人的経験から、その雑感を述べたいと思う。

私は、1998年に法政大学文学部哲学科を卒業後、図書館情報大学大学院修士課程、および博士後期課程に進学、2003年7月、山本順一教授のもとで、図書館情報大学で5人目になる博士（情報学）の学位を取得した。2003年10月、東京大学大学院情報学環助手に採用され、西垣通教授のもとで研究・教育活動を行っている。

図書館勉強会

まず、法政大学時代の自主ゼミ（「図書館勉強会」という名の課外学習会）について述べたい。当時の図書館司書課程の小川徹教授が、図書館司書をめざす学生・OBのために週1回、研究室を開放し、勉強会を開いていた。学科のゼミとは異なり、この勉強会は、具体的な目的を持って学びたい人たちが課外に自主的に学んでいたため、非常に学習意欲の高いグループであった。ゼミの形式は、図書館学の基本テキストを一年かけて分担講読するというものだった。勉強会は毎週2時間以上に及び、終了後は大抵、食事や飲み会となった。このゼミで図書館情報学が意外にも二百年近い歴史を持つ分野であることを知り、関心を深めていった。そして、教授から図書館情報大学修士課程の受験を勧められたのが、情報学分野への転向の直接のきっかけとなった。

論文指導と「けなし」の教育

図書館情報大学大学院では、二つのゼミ（と言えるもの）を経験した。一つは指導教授の山本順一先生の学位論文指導であり、もう一つは、投稿論文の作成を目標とする関口礼子先生の院生対象の授業であった。どちらも、毎週全員が自分の論文の進捗状況を報告して、参加者から批評を受けるという手法であった。関口先生の論集『情報社会試論』は今年で第10号を迎える。ウェブで公開もしているせいか、個人発刊の論集にも関わらず広く関心を呼んでいるようで、私の最初の業績となった（ちょっと恥ずかしい）論文の批評や引用もウェブで散見される。当時はありがたみが十分分からなかったが、修士の時代に論文を一本書けたということは、その後の教歴、つまり非常勤講師採用の際にも重要な鍵となった。この論集は現在、関口先生と私が共同編集をしている。

一方、指導教授のゼミでは毎週ケチョンケチョンにけなされ続けた。いわく、「実証性の伴わない言葉など寝言と変わらない」。毎週のように「寝言」「寝言」と言われ続けて育てられた。だが、その根底に愛があることは言葉の調子からも分かるし、相談に伺うと、一度として「忙しいから」と断られたことがなかったことからも明らかだ。この愛深き「けなし」教育も、そのときはよく分からなかったけれど、今となっては非常に重要な、全人的かつ学術的な指導であったことを痛感している。つねに今の自分の身の程を知り、慢心せず向上をめざすという意味でも、また、いつか師匠を乗り越えてやろうという密かな野心を絶やさぬためにも、愛深く叩かれ続けることは重要だ。今、自分が大学院に教職を得て、そのように叩かれて教育されてこなかった院生の姿、傷つきやすく、しかも捨てられないプライドに苦しむ姿を目の当たりにするにつけ、このような「けなす」教育を受けられたことをありがたく思う。子供時代には「ほめる」教育が必要だが、院生時代には「けなす」教育が必要であると思う。院生は、サラリーマンとは違って他人の要求に応えようとするより、閉鎖的世界で自分のやりたい研究に没頭する傾向がある。そして、間違って「先生」などと言われるような立場にもなっていく。それでは、人間的に未熟な学者が生まれてしまうのではなかろうか。自らを相対化できる目を養うためには、権威ある他者から否定される経験が何度か必要だ。院生の場合、それは師匠や先輩からの指導であろう。

大学院のゼミでは帰属意識も強くなってくる。山本順一先生は『図書館情報学研究』という論集を2002年から発刊されており、内外の院生の投稿を広く受け付けてい

る。私もドクター時代に一本書かせて頂いた。創刊のとき、「こんな論集がまともなものになるはずがない」という他大学教授の言を伝え聞いて大変発奮したのを覚えている。この論集も、今年で第4号、なかなか充実した論集として定着してきた。

共同研究の体験

博士課程在学中、当時は別の大学だった筑波大学哲学・思想学系の仲田誠助教授のゼミにも毎週参加させて頂き、共同研究を行う機会に恵まれた。情報メディア利用と一般的な価値観を問うアンケートを作成・実施し、両者の関係を分析した。数量的な研究は初めてであり、毎週新しい知識との格闘であった。受講生にも、それぞれ得意分野があり、同じプロジェクトを遂行する中で、各人の研究成果を共通の利益とする共同研究の手法を学んだ。このゼミでは、研究成果を国内外の学会で発表し、論文を投稿、ドイツの情報倫理学者ラファエル・カプーロ教授と短期の共同研究を行うなど、個人では決してなしえないダイナミックな研究活動を行うことができた。このときのカプーロ教授との関係は現在も続いており、2004年10月には仲田先生と私がカプーロ教授の主宰する国際情報倫理学センターの国際シンポジウムに招かれた。

学際情報学の難しさ

図書館情報大学大学院修了後、東京大学大学院情報学環の助手として採用された。その名のとおり「情報学の環（わ）」をめざす学際的な情報学の研究組織である（教育の組織は「学際情報学府」という）。第一印象は、「図書館情報大学から図書館色を取ってアート色を加えたようなところ」だった。情報学環は、2000年にできた大学院のみの新しい組織だが、新聞研究所からの伝統を持つ社会情報研究所と2004年4月に合併（名称は大学院情報学環）、マスコミ論など社会情報学分野が強化された。情報学環は文理融合を一つの旗印に学際的な情報学を開拓しつつあるが、学際性と専門性との両立はどこまでも難しい。共通理解の構築のために、西垣教授が「基礎情報学」を提唱されているが、そもそも基礎情報学自体が従来の「情報＝モノ」という実体論的情報概念を克服して、「情報＝意味作用」という関係論的情報概念に基づいて生命現象から社会現象までをとらえ直そうという新しい挑戦であり、ラディカルな試みであるため、それが情報学の各分野に応用されるには、まだ時間を要する。西垣教授のゼミでは、自己組織情報論に関する資料の分担購読、関連分野の動向や論文の紹介が主であり、学際情報学の開拓のために共通理解の基盤づくりが大変大きな課題となっている。

図書館情報学の特色

私の場合、図書館情報学という具体的な一分野を修めたことが、情報学に取り組むための重要な拠り所となっている。しかし、図書館情報学は基礎学問というよりは応用学問であり、単独で学ぶべきものではなく、同時に別の一分野を深める努力が必要だと言われる。欧米では学部で何らかの学科を卒業した人が、修士課程で図書館情報学を学ぶというシステムが多い。

図書館情報学だけを学び続けると、広い情報世界を扱っているつもりで、実際には狭い分野に閉じこもっていることになる。学部から図書館情報学を専攻し、他分野の「雑菌」にあまり触れてこなかった人は、「ヌードマウスのようだ」と評されることがある。無色透明の情報処理には適するが、現実の社会での生存能力が低い、弱々しい生き物というイメージである。

人にもよるだろうが、私の場合は、学部で哲学を学んだことが多少の手がかりにはなったと思うし、指導教授の方針が、きちんと面倒も見て下さる「放し飼い」(放任主義ではなく放牧主義と言うべきであろう)であったため、一定の関心を維持し続けながらも複眼的な学習が可能であったことが、きわめて幸運であった。

情報の分類学

現在私は、本務の傍らいくつかの大学で兼任講師を務めている。今年から明治大学の学部生を対象に情報学のゼミを担当することになった。テーマは「情報の分類学」。自分の関心の深い領域や、これまであまり関心を持たなかった分野が、知識の地図の中でどこに分類されるのかを知ることは、私も体験したように、学生たちにとって、一種の世界観拡大の体験ともなるだろう。また情報の内容(コンテンツ)だけでなく、媒体(メディア)にも様々な種類がある。一般の書籍であっても、知識の分類法ではなく、情緒に基づいた分類の仕方、例えば「泣ける本」、「癒される本」、「元気が出る本」のような分類法があっていいと思う。

自分が情報学のゼミを持つ立場になり、縁あって受講する学生にどれだけ残るものを与えることができるかは、全くの挑戦である。とにかく、少しずつにせよ、学恩を後続に還元して行かなくてはと考えている次第である。

(たけのうち　ただし/情報学)